2021 年 9 月 5 日 聖霊降臨節第16 主日礼拝メッセージ

「神は小さくされた者たちの輪の中に」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 18 章 12−20 節

9 月になり、厳しい残暑も幾分か和らいだようにも感じていますが、コロナの感染者は相変わらず増え続けています。大阪では感染者数がうなぎ上りで、私たちの身近な所でも、次々と感染の知らせが入って来ています。いつ、どこで、誰が感染しても、また無症状・無自覚のまま他人に感染させてしまっても、おかしくない状況が続いています。ですので、「どうぞ皆様もお気をつけください」として言えないのがもどかしいこの頃です。

さて、今回の聖書のお話は「迷い出た羊のたとえ」として有名なお話でした。絵本や紙芝居にもなっているので、ご存知の方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。簡単に言うと、「ある日、100 匹の羊を飼っている羊飼いが、1 匹を見失ってしまったので、残りの 99 匹をその場に残して 1 匹を探しに行って、無事に見つけ出して、喜んだ」というお話です。

しかし、もしこれが学校の教室での話だったらどうでしょうか。例えば、30 人の子どもたちがいる教室で、1 人の子どもが休み時間が終わっても戻って来なかった。その子を心配した先生は、他の 29 人の子どもたちを教室に残して、いなくなったその子を探しに行く……。あまり現実的な話ではありません。もしも、そんなことをして、他の 29 人の子どもたちに、何かあったら大変です。にもかかわらず、一人がいなくなったら、いても立ってもいられない。考えるより先に体が動いてしまって、探しに行ってしまう……。子どもを思う親の気持ちと同じように、羊飼いである神様は、迷い出た羊である私たち一人一人をそれほど大切にしてくださっている……。多くの場合、このたとえ話はそのように理解されて来たのではないかと思います。

しかし、本当にそうでしょうか。今から約 2000 年前にイエス様がこれらのたとえ

話を語りかけられた相手というのは、ガリラヤ地方に住む貧しい農民たちでした。とりわけ危険で、なおかつ卑しい、宗教的に穢れていると見なされていた羊飼いや漁師たちでした。ですから、その人たちは「ある人が羊を 100 匹持っていて」（12）と聞いた時点で、すぐに大規模な農園の所有者、自分たちの雇い主である主人を連想したことでしょう。羊飼いはもちろん雇われている貧しい農民たちです。そして羊飼いは 100 匹の羊たちを山に連れて行ったということですが、当然羊飼いは一人ではなかったはずです。羊は貴重な財産ですから、その羊たちを連れて行く時には、必ず複数人で行くのが遊牧民の常識でした。ですので、この羊飼いは「迷い出た 1 匹」を探しに行く時に、99 匹を放ったらかしにしたわけではなく、他の羊飼いたちに任せて行ったに違いありません。

なぜ、その 1 匹を探しに行ったのかというと、その 1 匹が他の 99 匹よりも特別に価値が高かったからではなく、1 匹でも失ったら、主人から大目玉を食らう、それこそ「盗んで売り飛ばしたんだろう」と疑いをかけられるかもしれませんし、賃金が支払われないどころか賠償金を請求されるかもしれないという、切羽詰まった思いがあったのではないかと想像します。

そして「その 1 匹を見つけると、迷わずにいた 99 匹よりも、その 1 匹のことを喜ぶ……」（13）とあります。羊に限らず、無くしものを見つけた時というのは、誰でもきっとそういうものではないでしょう。それは誰にでも思い当たることではないかと思います。続く 14 節は、このたとえの解説になっていて、「そのように、これらの小さな者が一人でも失われることは、天におられるあなたがたの父の御心ではない」と言われていますが、この言葉は何だかイエス様の言葉らしくありません。同じたとえ話が「ルカによる福音書」（15：4－7）にも記されていますが、そちらでは「このように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にある」という「悔い改め」の話としてまとめられています。これらは明らかにイエス様よりも何十年も後の時代に、福音書をまとめた記者たちが伝え聞いていた理解だったと考えられます。

ですから、歴史の中を歩まれたイエス様が、実際に語られたこのたとえ話の元々の内容は、「見失ったものを見つけるまで探すこと」そして「見つけたら、皆で共に喜ぶ」ということの 2 点だったのだろうと考えられています（山口里子『イエスの譬え話 I』169 頁）。では、なぜイエス様は、そんな当たり前とも思えるようなことを、わざわざ人々に語りかけられたのでしょうか。それはそんな「当たり前」のことが、当時のガリラヤの農民たちの間で壊れかけている、無くなりかけているという思いがあったからではないかと考えられます。ローマ帝国の植民地支配下で、ガリラヤ地方の人々の間でも格差が拡がり、極一部の富裕層がいる一方で、圧倒的大多数の農民が搾取の暴力の構造の中で、借金に苦しみ、貧民化・奴隷化して行きました。そんな中で、誰かが困った時には助け合い、喜びは皆で分かち合うという、いわば「当たり前」とも言えるような伝統的な共同体意識も、失われつつあるような危機的状況にあったのではないかと想像します。

先の見えない抑圧状況が続く中、人々の心は狭くなり、荒れていき、横のつながりもバラバラになって行きそうになっている中で、「あなたたちは『迷い出た一匹』『失われた一人』を見捨てていないか」と問いかけ、「もうダメだ」と希望や自尊心までもが失われてしまわないように、仲間たちとのつながり、連帯が分断されてしまわないように、励まし力付けたいというイエス様の思いが、このたとえ話の根底にはあるのではないでしょうか。

続く 15 節以降の話も、仲間たちとのつながりの話となっています。「きょうだい」を注意し、とがめる時にはまず二人だけで。その次に 2、3 人で。それでも聞き入れなければ教会で……。ここでは「教会」と書かれていますが、この言葉の元々の意味は、人々の集まり、「集会」という意味ですから、要するに大勢の人が集まる公の場で、ということでしょう。これらのこともいつの時代にあっても、当然と思えることでしょう。このお話の重点は、やはり最後の 20 節「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」だと思います。相手に何度伝えても分かってもらえない。自分たちが一生懸命に取り組んでも、なかなか目に見え

る成果が出ない。それでも、決して諦めることなく、仲間たちと一緒に取り組んでみる……。自分自身でも無力だと感じている一人一人だけれども、そんな小さくされた者たちが二三人集まって協力し合う中に、「私もいるよ。一緒にいるから大丈夫。諦めないでやってみて」と神様は言って下さっています。

神は小さくされた者たちの輪の中に、共におられ、それらの人たちの手を通して働かれます。今、このコロナ禍の中を生かされている私たちは、どこに目を向け、何を大切にすればよいのでしょうか。日に日に感染者は増え続け、周りでも感染してしまい、「どうしようか」「困った」という声も聞かれています。身の回りでも、閉店するお店が昨年から沢山ありましたが、最近になってからさらに増えて来たようにも感じています。そんな中、私たちには一体何が出来るでしょうか。私たち一人一人に出来ることは何もないように感じてしまいます。何をしたらよいのか、明確な答えは分かりません。ですが、私たちは諦めません。なぜなら、神様は小さくされている人の苦しみを、最優先される方だからです。そしてそのような小さくされた人たちが集まる輪の中に、神様は共にいてくださいます。私たちは今日も、その神様から力と励ましを与えられて、ここから歩み出して行きます。